

旅館の露天風呂に熊出現！素っ裸の女性が逃げ惑う

「あー、落ち着くねー」

「ほんと、自然一杯で最高ー」

2人の女性客が旅館の露天風呂に入っている。ここは、東北地方にある旅館の露天風呂だ。かなり山奥にあるので、隠れ家的な雰囲気がある。

都会の喧騒を忘れるために、2人の東京のOLがこの旅館を訪れていた。

なかでも一番楽しみにしていたのは、露天風呂だった。

「ほんと、生き返るー」

「普段の疲れとか吹っ飛ぶねー」

同じ会社に勤める、28歳同士のOL二人旅だった。

共に結婚はしておらず、気の置けない者同士での旅だった。

がさがさっ。

露天風呂の奥の茂みの方から、物音がした。何だろうと、2人が目をそちらの方へ向けた。すると、そこから黒い大きな影が姿を見せた。

「くっ、熊っ」

「嘘ー、いやー」

そこにいたのは、紛れもなく熊だった。

大きさは2メートルくらいある。

大人の熊だ。

OL が大きな声を出したことで、熊も2人の裸の OL の方を向いた。

そして、走り出した。

「いやあ——」

2 人の OL は湯船から上がって、脱衣所の方へ行こうとした。

でも、その脱衣所の入口に近いところに熊が向かっていた。

2人は、露天風呂の中で、なんとか熊との距離を保てる場所へと移動する。

声を出したり、音を立ててはいけないと2人は思い、じっと耐えることにした。

熊が露天風呂から脱衣所へ行く入口に、腰を降ろした。

2 人は露天風呂の湯船の外に出て、なるべく熊から距離を取れるところに移動していたけど、露天風呂には仕切りがあるので、これ以上は逃げられない。

なんとか、脱衣所の方へ戻って、服を着て、旅館の方へと戻らなければいけなかった。

でも、熊はその場所が気に入ったのか、なかなか動かない。

2 人はいつまでも裸のまま、熊が脱衣所の入口付近を離れる機会を、じっとうかがい続けていた。

2 人は小声で相談する。

「どうするー」

「あの熊、あそこ全然動かないよ」

「いっそ、こっち側から逃げられないかな」

1 人の OL が露天風呂の外に逃げられないかと提案する。

「ちょっと、待ってよー。私たち、今、マツパだよ。それに柵を越えられないし、外れないでしょ」

「柵は頑張れば外せるでしょ。裸なのは確かにそうだけど、それよりも命の方が大事じゃない？」

それは確かにそうだったけれど、裸で逃げるのは当然、抵抗があった。

この露天風呂は旅館とは離れた場所にある。長い回廊を通して、旅館と露天風呂はつながっている。

旅館からここに来ているので、どの方向に行けばいいかはわかっていた。

問題は、露天風呂の柵が簡単に外れるのかと、裸で逃げるということだった。

旅館の方から露天風呂に向かう客や、旅館の従業員と鉢合わせたりしたら、裸を見られてしまうことになる。

今、2 人はタオルすら持っていない、素っ裸の状態だ。

裸でここから逃げるのであれば、いずれは誰かに助けを求めなければいけないのではあるけど、20 代の女性が素っ裸で逃げることはかなりハードルが高かった。

けれども、このままここにいれば、命の危険があることは間違いなかった。

「ねえ、どうするよ。もう逃げた方がよくない？」

「うん、そうだね」

本当は 2 人とも、裸で外に逃げたくなんかなかった。

でも、脱衣所までの道を、熊に完全にふさがれている以上、ここから露天風呂の外に逃げるしかなかった。

「じゃあ、柵、ちょっと壊してみるね。その間、熊の方しっかり見といて」

「オッケー」

1 人が生垣の柵を壊しにかかる。

1 人は熊の動きをしっかりと目を離さず確認し続ける。

柵はやはり簡単には外れなかった。

しっかりと建付けられており、簡単に外れるものではない。

それでも、かなり力を入れると、柵が取れた。

「よしっ。あと 2 つくらい柵取ったら、ここから出られる」

女性は柵を取っていく。

その間、熊は依然として、脱衣所への入り口の前に陣取り続けていた。

でも、時折、落ち着きを無くしつつあるように見えていたので、もうすぐ動き出すんじゃないかと、熊を監視している女性は思っていた。

「よし、取れた。これでいけるよ」

柵を取り外していた女性がそう言った瞬間、熊が突然、起き上がり、2 人の女性の方に走ってきた。

「いや—————」

2 人の女性は雪崩れ込むように、柵と柵の間から、裸の身をよじりながら外へと出ていった。